

令和元年12月の現況と1月の対策（野菜）

現況（元年12月20日現在）

1 施設野菜

果菜類

(1) トマト

若狭地区の越夏栽培は、12月上旬で収穫終了した。

若狭地区の越冬栽培は、継続収穫中である。

抑制栽培は、坂井地区では12月上旬で収穫終了した。福井、南越地区では4～6段果房を収穫中である。

うどんこ病、葉かび病が微発である。

(2) ミディトマト

坂井、二州、若狭地区の促成長期どりでは、15～21段果房が開花中で、8～14段果房を収穫中である。

葉かび病が微～少発、灰色かび病が微発、コナジラミ類が少発である。

(3) ミニトマト

若狭地区の越冬栽培では、17～18段果房が開花、10段果房を収穫中である。

(4) キュウリ

南越、二州地区では、11月末から12月上旬にかけて出荷終了した。

(5) イチゴ（高設）

福井、坂井、南越、若狭地区では、第1果房が収穫中である。

ハダニ類が微～少発である。

葉根菜類

(1) 軟弱野菜

福井地区のホウレンソウは、10月下旬播種を45～60日で収穫中である。

(2) 青ネギ

若狭地区の周年水耕栽培は、10月中旬播種分を収穫中である。播種から収穫までの日数は約75～80日である。

(3) コカブ

三里浜砂丘地のコカブは、気温が高く推移したため、生育は平年より5～7日進んでいる。

2 露地野菜

果菜類

(1) ピーマン

丹生地区では11月中旬で出荷終了した。

(2) 一寸ソラマメ

坂井、若狭地区では、草丈15～20cm、側枝4～7本となっている。

葉菜類

(1) ネギ

4月下旬～5月下旬定植で、収穫終了もしくは終盤となっている。奥越地区では12月13日に出荷終了した。

越冬どりは、福井、奥越地区では葉鞘径が15～17mmで、平年より生育が早くなっている。ネキリムシ、ハモグリバエ類が微発、黒斑病、葉枯病が少発である。

(2) キャベツ

秋冬どりは、坂井北部丘陵地や県内の水田地帯で、11月末～12月下旬にかけて収穫がほぼ終了した。定植期の乾燥で生育が遅れたものは、収穫継続中である。

坂井北部丘陵地の越冬春どりは、本葉4～7枚となっている。

(3) ブロッコリー

福井、南越地区では、12月中～下旬まで収穫予定である。

(4) 勝山水菜

葉数15枚程度、草丈50cm程度で、生育は平年より遅めである。白斑病が局少発である。

根茎菜類

(1) ダイコン

青果用は、三里浜砂丘地では11月末、坂井北部丘陵地では12月上旬に出荷終了した。加工用は、三里浜砂丘地、坂井北部丘陵地では、2月まで収穫が続く見込みである。

(2) ニンジン

坂井北部丘陵地では、12月下旬まででほぼ収穫が終了見込みである。三里浜砂丘地では、12月上旬が出荷ピークとなっており、1月末まで収穫が続く見込みである。

(3) カンショ

坂井北部丘陵地では、キュアリング貯蔵品を12月中旬から出荷開始しており、翌年6月まで出荷予定である。

(4) サトイモ

奥越地区では、12月25日に出荷終了予定である。

(5) ラッキョウ

生育は平年並みである。ハモグリバエ類が少発である。

(6) タマネギ

永平寺町では、草丈16cm、葉鞘径5mmとなっている。

坂井地区では、早いもので草丈23～27cm、葉鞘径5mmとなっている。

若狭地区では、草丈17cm、葉鞘径3～4mmとなっている。

(7) ニンニク

永平寺町では、草丈30～35cm、葉数5～6枚となっている。

対策

施設栽培では、降雪に対する対応の遅れにより大きな被害が発生することもあるので、早めに雪害防止対策を講じておく。また、施設内の保温、採光に努め、生育・収穫の遅延や低温障害等の発生を防止する。なお、天候の変化に留意しながら、内張りやトンネル等の開閉が遅くならないよう適切な管理を行う。越冬野菜は、圃場の排水対策などを徹底して生育を確保する。

1 施設野菜

(1) イチゴ

最高気温28℃、最低気温8℃を目安に温度管理を行う。また、ミツバチや天敵への影響を考慮しながら、うどんこ病やハダニ類の防除を徹底する。

(2) 軟弱野菜

生育が遅延しないように保温管理を行う。また、生育後半はかん水を控え、葉色が濃く、厚みのある葉に仕上げる。

ハウレンソウは、べと病抵抗性品種を利用するとともに、ハウス内が過湿になるのを避ける。コカブの根部肥大には日照の確保が重要であるので、間引きが遅れないようにする。

(3) 果菜類の育苗

ア 育苗床

育苗床は、一般に電熱温床が利用されるが、温度の確保のため保温性が高く、温度ムラの少ない構造とする。なお、播種床は高温を必要とするので、電熱線を密(120W/m²)に設置する。また、鉢間隔が不十分な場合には日当たりが悪くなって苗質が低下しやすいので、苗床面積を十分に確保しておく。

イ 床土・資材準備

床土は、病気や害虫、雑草発生の無い土に堆肥や肥料を混合して、保水性、排水性が良く、肥効が安定したものを使用する。床土消毒は、薬剤消毒や蒸気消毒等を行うが、いずれも堆肥を混合する前に用土のみを消毒する。なお、薬剤消毒では低温でガス化が弱いので消毒期間を十分にとり、薬害を発生させないように十分にガス抜きを行う。トレイやポット等の育苗資材についても清潔なものを準備する。

ウ 育苗管理

① 温度管理

多くの果菜類の発芽温度は28～30℃程度であり、発芽までは温度不足にならないよう播種床は別に設置する。発芽後は、低温障害に注意しながら苗の生育に合わせて徐々に温度を下げる。

② 日照確保

苗の徒長を防ぐため、光透過率が高い新しい資材を用いる。また天気の良い日は育苗ハウスのカーテンやトンネルを開放してできるだけ日照を確保する。

③ かん水

多かん水は苗を徒長させやすいので、夕方には床土の表面が乾く程度にかん水を行う。なお、床土にモミガラを混入した場合は、保水性が劣ることからかん水回数が増えて苗を徒長させたり、乾燥によって苗を萎れさせたりしやすいのでかん水管理に注意する。

④ 病虫害防除

トマト黄化葉巻病はタバココナジラミが媒介するウイルス病で、育苗期に罹病すると大きな被害につながるため、タバココナジラミの定期的なローテーション防除に努める。また、ハウス内の除草など物理的な防除に努める。灰色かび病などの病虫害防除を徹底し健全な苗の生産に努める。

2 露地野菜

(1) 秋冬野菜の圃場衛生

キャベツ、ハクサイ、ダイコン等の収穫を終了した圃場は、収穫残さを圃場外に持ち出し、翌年の病虫害の原因にならないようにする。

(2) 越冬野菜の管理

ア 一寸ソラマメ

1 2月上旬までに不織布等でトンネル被覆を行うが、被覆する前に赤色斑点病の対策として、薬剤防除を行う。また、排水溝を整備して湿害を防ぐ。

イ キャベツ、ネギ、タマネギ、ニンニク、ラッキョウ等

排水不良による湿害や病害を防止するため、排水対策を徹底する。

3 ハウスの雪害防止

冬期間利用するハウスは、降雪前に雪害防止対策を十分整えておく。大雪警報・注意情報等が発令された場合には、直ちに対応し被害防止に努める。

(1) ハウスの補強

積雪によるハウス倒壊を防止するため、丸太や竹等をハウス内に持ちこみ準備しておき、降雪が予想される場合は、3～4 m間隔で支柱を立てハウスを補強する。

また、積雪荷重により肩部が左右に広がると倒壊しやすくなるので、ワイヤー等で引き付けておく。ワイヤー間隔が約6 m以上になると、ワイヤー間中央部ではその効果がほとんどなくなるので、支柱と同等の間隔で、支柱の間に張ることが望ましい。



(2) 屋根雪の滑落促進

屋根雪はハウス内温度を4℃以上にすると、ほとんどの場合滑落するため、加温機やストーブによる加温を積極的に行う。また、内張りカーテンがある場合は、カーテンを開放し天井まで暖かい空気が行き渡るようにする。

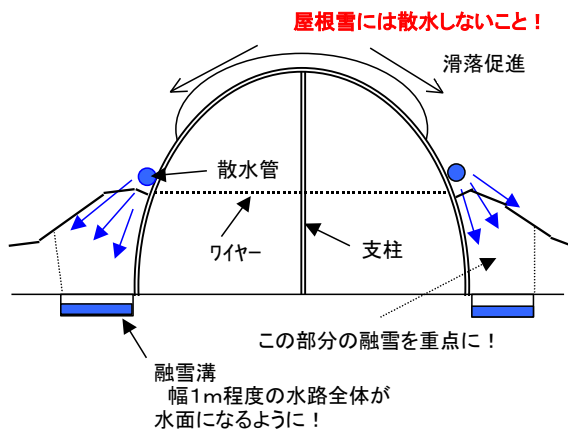
滑落しない場合は、手作業で強制的に滑落させ、屋根に雪を乗せたままにしない。特に、積雪による被覆資材のゆるみが直管パイプに引っかかって屋根雪の滑落を阻害するので、積雪が多くないうちに人力で除雪しておく。特に、天窗は積雪しやすいので注意する。

(3) ハウス周囲の除雪

滑落した雪がハウスのサイド部に積もった場合は、早期の除雪と散水による融雪を行う。

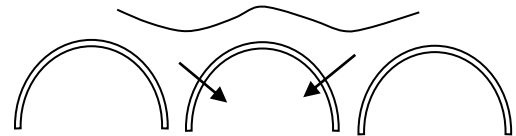
なお、屋根部まで積雪してから除雪する場合は、ハウス両側を均等に除雪するようにし、片荷重によるハウスの倒壊を防ぐ。

除雪機を用いる場合は、ハウス周囲を整理して除雪機の通路を確保しておく。なお、効率的に除雪を行うには、いずれも積雪が多くなる前から稼動することが重要である。



ハウスの雪害対策

ハウスの隣接間隔が狭い場合は、1棟おきに休作して被覆材を除去し、雪の捨て場を確保する



(4) 被覆資材を除去してあるパイプハウス

被覆資材を除去してあるパイプハウスでは、パイプ交点等に積もった雪が着雪し屋根一面に積雪するので、時々人力で雪を落としておく。また、ハウス肩部や腰部のパイプ等が積雪に埋没したままにしておくと、沈降圧によって変形、破損等の原因になるので、早めに掘り出しておく。



ハウスを覆うぐらいの積雪があった場合、肩部から除雪を始める